ハワイアン・ボードの初期日本人移民伝道

吉田　亮

一　はじめに
二　ハワイのキリスト教伝道
三　ハワイアン・ボードの日本人移民伝道
四　むすび

一　はじめに

従来、日本プロテスタント・キリスト教史の論議は、日本の国内伝道のみに集中されてきた。そこでは、外国ミッション、日本人伝道者及び両者の協力による国内伝道が問題にされ、日本社会とキリスト教がどのような関係をもってきたのかということが問題とされた。

しかし、そこでは次のような点が欠落していた。

さまざまな理由で、満州、朝鮮、台湾その他のアジア諸地域及びハワイ、アメリカ、カナダ等に移住していった日本人移民へのキリスト教伝道は、どのような展開をみせたのか。日本人移民に対して、外国ミッション及び日本人伝

道者はどのような関係をもち、どのような伝道を展開したのか、また、それぞれの地域社会とどのような関係をもったのかという問題であり、更には日本人の海外移民への伝道を、日本プロテスタント・キリスト教史のなかでどのように評価し、位置付けていくのかという問題である。

本稿は、これらの課題ともいうべき問題に光をあてる足がかりとして、ハワイの日本人移民への伝道に焦点をあてて考えていきたい。

ハワイの日本人移民へのキリスト教伝道は、周知のように一八八七（明治二〇）年九月三〇日にハワイに到着した美山貫一の禁酒会、日本人共済会の活動によって具体的な展開がなされたことは知られている。[1] 当時、日本総領事であった安藤太郎は、[2] 後に外務省に報告した「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」のなかで、美山貫一の伝道について次のように述べている。

> 美山氏一タビ同会〔日本人基督教青年会――吉田〕ニ臨席セショリ人々始メテ福音ノ何物タルヲ通暁セルガ如ク爾来集会スル者漸ク接踵スルニ至リタリ。故ニ在布我移住民ノ間ニ基督教ノ誘導ハ抑モ此時（明治廿年十月）ヲ以テ其萠芽発生ノ期ト称スルモ敢テ不可ナル勿ルベシ[3]

しかし、美山貫一の伝道は、彼一人の力で急激な成果をあげたのではなく、その先史ともいうべきハワイアン・ボード（The Board of the Hawaiian Evangelical Association, 以下ハワイアン・ボードという名称を用いる）の日本人移民伝道の基礎に依存しているといっても過言ではない。

ハワイアン・ボードの日本人移民伝道は、従来、一八八六（明治一九）年より開始されたといわれてきた。[4] しかし、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の機関誌 “Missionary

Herald" の一八八八年二月の 'Editorial Paragraphs' 欄には「ハイド博士は、彼ら日本人たちのために三年間にわたって奉仕をしてきた」[5]と述べられている。つまり、一八八五（明治一八）年より日本人伝道が開始されたというのである。もしそうであれば、一八八六（明治一九）年より日本人移民伝道が開始されたという説を再検討してみる必要に迫られる。

本稿では、ハワイアン・ボード[6]の日本人移民伝道はいつから開始され、またその伝道はどのようなかたちで展開されたのかという問題を検討していくにあたり、ハワイアン・ボード側の資料である年会報告 "Annual Report of Hawaiian Evangelical Association" 及びその月刊紙 "The Friend" を使用する。それによって、『日米文化交渉史5——移住編』、『ハワイ日本人移民史』、『先駆九十年　美山貫一と其時代』及び奥村多喜衛『布哇伝道三十年略史』（後述）が述べているあいまいな年代設定を、これらのものが基礎においているとおもわれる資料にたちかえって再検討する。

そこでまず、ハワイアン・ボードの日本人移民伝道が開始される以前のハワイのキリスト教史を略述し、次にハワイアン・ボードの日本人移民伝道の開始時期及びその展開過程について述べていきたい。

二　ハワイのキリスト教伝道

ハワイのキリスト教伝道は、"How the Gospel Came to Hawaii"[7]によると、オプーキア（Opukahaia, 1792—1818）という名のハワイ青年の死が契機となり、一八二〇年三月よりアメリカン・ボードによって開始されたのであった。

一八〇八年、一六歳のハワイ青年オプーキアは、コネチカット州ニューヘーブンのブリントノール船長（Captain Brintnal）に拾われてニューヨークへ連れていかれた。彼は、部族間の戦いで両親を失い、孤児となった。その後、祭司である叔父の養子となったが、彼は目の前で両親、兄弟、おばが虐殺されるという恐ろしい経験をしたため、母国ハワイを去る決心をし、叔父のところを逃げだしたのであった。

彼は、船長によってニューヘーブンに連れていかれ、そこでヘンリー（Henry）という名を与えられた。伝承によると、彼はイェール大学の門のところで泣いているのを発見され、なぜ泣いているのかと尋ねると、「誰も勉強を教えてくれない」と答えたといわれている。数人の学生は、茶色の肌の少年に関心をもち、彼に勉強を教え始めた。彼はイェール大学のドワイト（Edwin W. Dwight）の家に滞在し、はじめてキリスト教の教理を教えられた。その後、彼はコネチカット州トリングフォールド（Torringfold）の偉大な伝道事業の開拓者であり、政治家であったミルズ（Samuel J. Mills）のところへ移り、そこで受洗した。

彼は、ニューイングランドの多くの教会で、母国ハワイにキリスト教を伝えてくれるように訴えた。その訴えが功を奏し、ボストンのアメリカン・ボードは、「在米外国青年の海外伝道者を養成するため」、コネチカット州コーンウォール（Cornwall）に伝道学校を設立した。しかし、その夢は実現されないままに、彼は一八一八年二月発疹チフスにかかって逝去した。

オプーキアは死ぬ直前まで、ハワイに伝道者を送ってくれるように嘆願しつづけた。ついに彼の嘆願は実現し、一八一九年一〇月一五日、アメリカン・ボードに「サンドイッチ島伝道団」が組織され、同年一〇月二三日に、ビンガム（Hiram Bingham）とサーストン（Asa Thurston）と三人のハワイ人を含む一七人の宣教師たちは、帆船テーデ

ャス（Thaddeus）でボストンを出航し、翌年三月三〇日にハワイのカイルアに上陸した。

アメリカン・ボードの運営諮問委員会（Prudential Committee of the American Board）より彼らに出された指令は、次のようであった。「あなたがたの目的は、これらハワイ諸島を実り豊かで、住み易い地にし、教会及び学校を建て、すべての人々をキリスト教文明の高度な位置に高め、後世の人々に永遠の幸福をもたらし、（中略）適当な語学力をつけさせ、手紙が書けるようにし、聖書を与え、読めるようにし、彼らを野蛮な習慣より心を転じ、私たちの広範な影響のもとに、文明化された生活や社会制度を身につけさせることである。特に、彼らを偶像崇拝、迷信及び悪徳より、生きる、あがないの神に改宗させることである[8]」。

これらの使命を遂行するために、アメリカン・ボードは正宣教師ばかりでなく、医者、印刷工、農夫と二人の教師を派遣した。

アメリカン・ボードの宣教師たちがハワイにやって来た当時、カメハメハ（Kamehameha）王一世が死に、彼の未亡人カアフマヌ（Kaahumanu）女王と新しい王の母ケオプオラニ（Keopuolani）は、タブーを破り、古い偶像崇拝を禁止していた。そのため、宣教師たちは王や族長の信任を得て、伝道と教育事業を開始することを許された。

アメリカン・ボードは、一八二〇年より一八四八年までに、男四五人、女一〇〇人の宣教師をハワイに派遣した。彼らの多くは二十歳代の情熱的な青年であり、伝道、教育、医療、出版等あらゆる分野で活躍し、彼らの手によって多くの学校、神学校が建てられた。

一八三七年には、大宗教覚醒運動がおこり、信徒の数が急増していった。

一八五二年には、外国伝道会が組織され、ハワイの宣教師は、カロリン諸島、ギルバート、マーシャル、マークエ

サスに渡っていき、この計画は、アメリカン・ボードのミクロネシア・ミッションとなった。

一八六三年には、ハワイ福音連合会（The Board of the Hawaiian Evangelical Association, 通称ハワイアン・ボード）という名の下に伝道会が組織され、アメリカンボードより独立した。最初の役員は、会長コーン（Titus Coan）、副会長ユッド（G. P. Judd）、書記ギュリック（L. H. Gulick）、とクラーク（E. W. Clark）、会計ホール（E. O. Hall）とバートレット（Ichabod Bartlett）であった。

ハワイアン・ボードの事業は次のように定められている。[9]

北太平洋でのハワイアン・ボード事業に関わる、アメリカン・ボードの運営諮問委員会より独立しており、ハワイ諸島のホーム・ミッションを担当する。ハワイ人の伝道者や、教師、牧師の妻になる女性を教育する。有益な本やパンフレットを準備、出版及び販売する。そして基金の収入、支出はこれらの目的に寄与する。ハワイアン・ボードの目的は、全力をつくしてこれらの職務を遂行することである。こうしてハワイ諸島をキリスト教化する事業を強化し、助力すると同様に、北太平洋のその他のグループの伝道会の仕事をも援助する。[10]

ハワイアン・ボードによって、一八八二年よりハワイ在住の中国人伝道、一八八八年よりポルトガル人伝道が組織された。

三　ハワイアン・ボードの日本人移民伝道

ハワイの日本人移民に対するキリスト教伝道が、ハワイアン・ボードのハイド（C. M. Hyde）によってはじめられた頃、日本人のハワイ移民の動向はどうであったのだろうか。

周知のように一八六八（明治元）年五月一七日に、「元年者」と呼ばれる最初のハワイ移民一五三名が到着して以来、日本人移民はしばらくの間とだえていた。[11] しかし、一八七一（明治四）年八月一九日の日布修好通商条約の調印、一八八四（明治一七）年四月二三日の日本人移民ハワイ渡航約定書の締結によって、第一回「官約移民」の募集が再開された。募集は山口、広島を中心におこなわれた。当時は西南戦争のため、政府が紙幣を乱発し、また、軍事景気によるインフレと、その後のデフレの結果、日本全国は不況に襲われ、農村はそれに追い打ちをかけるように凶作が続いたため、困窮状態にあった。そのため、第一回船の申込数は二八、〇〇〇名に達したという。そのうち九四四名が選ばれ、第一回「官約移民」として一八八五（明治一八）年一月二七日、輸送船「ザ・シティー・オブ・トーキョー」（The City of Tokyo）でホノルルに向かい、このうちの大部分は、ハワイ各島の砂糖耕地に配属された。しかし、雇い主の契約不履行や酷使、炎天下での不慣れな労働、言葉の違いなどの原因より、移民間から不平不満の声が高まり、各地でストライキがおこった。その結果、契約違反であるが解約して帰国する者などが続出した。また、飲酒、賭博の悪習も広まっていった。

このようなかで、一八八五（明治一八）年一二月一五日、九八八名の第二回移民が到着した。ハワイ政府は日本移住民局を設置し、日本人労働者の権益、福祉、安全の保護にあたらせた。その長官には、第一回船で移民監督官としてハワイに来ていた中山譲治を任命した。しかし、これだけでは根本的な解決を得られなかったので、日本政府は紛争を防ぎ、日本人移民の権利を保護するためにハワイ政府と協議し、日布渡航条約を結ぶべくして、当時上海領事であった安藤太郎を折衝に当たらせた。一八八六（明治一九）年一月に、この条約は調印され、三月に実施された。

この新条約による第三回移民九四三人が、安藤太郎とともに北京号で横浜を出発したのは、一八八六（明治一九）

年一月末であった。もちろんこの条約は、既往にさかのぼって有効とされ、以後一八九四（明治二七）年の第二六回移民の送出まで、同条約のもとになされた。

こうした動向のなかで、日本人移民への伝道が開始されたのであった。では、いつ頃から、どのようなかたちで彼らへのキリスト教伝道が開始されたのであろうか。

そのことについて、まず、日本人側の資料をみてみることにしよう。

一八九四年より約四〇年にわたってハワイ伝道に従事してきた奥村多喜衛の『布哇伝道三十年略史』では、次のように述べている。[12]

布哇伝道会社書記C、M、ハイド博士は。(ママ)この歳々洪水の如く入り来る日本人に。(ママ)基督の福音を宣伝するの急要なるを感じ。(ママ)乃ち自ら進んで。(ママ)当時ホノルル青年会の使用せるクインエンマホールの一室に。(ママ)同胞のため宗教的集会を開始せり。是れ実に我同胞間伝道事業の発端なりとす。

これによると、布哇伝道会社（ハワイアン・ボード）書記C・M・ハイドによる、クインエンマホールでの日本人移民のための宗教的集会の開始が、その端緒であるとされている。しかし、クィーン・エンマ・マール（Queen Emma Hall）は一八八七年三月一二日に開館されたのであるから、日本人移民への伝道はそれ以後でなければならない。

次に、一八八六年二月にハワイ総領事として赴任した安藤太郎の日記、写真その他を典拠にして書かれた、今泉源吉『先駆九十年　美山貫一と其時代』では、次のように述べられている。[13]

日本から移民が来るとすぐその翌十九年から之等を基督教化してしまうために、米国組合派の布哇伝道会社の書記ハイド博士が主任となつて活動を始めた。

ここでは、一八八六（明治一九）年より日本人移民への伝道が開始されたことになっている。

このように、これら二種の日本側資料によって明らかになることは、日本人移民の増加に即応するかたちで、米国会衆派に属する布哇伝道会社の書記C・M・ハイドによって伝道が開始されたということである。しかし、その開始の年代については両者の間にかなりの相違がみられる。

そこで、ハワイアン・ボードの記録を見てみることにしよう。

ハワイアン・ボードの年会記録、"Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association"に日本人伝道の部門が設けられるのは、一八八八（明治二一）年六月に開催された第二五年会記録からである。[14] その報告では、日本人移民への伝道は「立派な成果」をあげ、ホノルルにいるクリスチャンはそのことに関心を寄せ、さまざまな援助をしていることが記載されているが、いつから日本人移民の伝道が開始されたかは記されていない。しかし、少なくとも一八八八（明治二一）年以前より開始されていたことは明らかである。

そこで次に、S・C・デーモン（Samuel C. Damon）によって一八四三年一月より発刊されるハワイアン・ボードの月刊紙"The Friend"をみてみることにしよう。

一八八八（明治二一）年五月号の「クィーン・エンマ・ホールでの伝道事業の日本人部門報告」と題する報告では次のように述べられている。[15]

一八八五年二月八日、日本人労働者が最初にこの国へ連れてこられたとき、すぐに日曜礼拝が日本人のために始められた。（中略）日曜日朝の礼拝は、クィーン・エンマ・ホールが一八八七年三月一二日に開館されるまで、ホテル街のY・M・C・Aホールで中断することなく、五人から二〇人の出席者、平均八人で続けられた。

この記事によって明らかなように、日本人移民への伝道は一八八七年三月一二日以降でも、一八八六年以後でもなく、すでに一八八五（明治一八）年二月八日の第一回移民がハワイに到着すると同時に開始されたのであった。

では、ハワイアン・ボードの宣教師はどのようにして日本人移民にキリスト教を伝えていったのであろうか。そのことに関して上記の“The Friend”に記載された報告は、端的に当時の模様を伝えている。(16)

最初の日本人一、〇〇〇人とともにやってきたR・W・アーウィン（R. W. Irwin）は、日本の或る教会の牧師の甥であるS・青木を連れてきた。そして青木が、同胞のために役立つ一人の若い神学生として能力を発揮できるように準備した。

青木は、毎日曜日の朝、Y・M・C・Aの建物の階上ホールの中で催される礼拝で、ハイドの通訳として活躍した。ハワイアン・ボードは、N・P・M・Iの教室で、英語を教える夜学校を始めた。H・M・ドウ（H. M. Dow）は、六カ月以上にわたって教育を受けたがっている人々を教え、ハワイアン・ボードは学校の費用を支払った。数人の日本人がこの町に雇われて来ていたが、出席者はあまりにも少なく、この計画をこれ以上長く続行することは不可能であった。

日曜日朝の礼拝は、クィーン・エンマ・ホールが一八八七年三月一二日に開館されるまで、ホテル街のY・M・C・Aホールで中断することなく、五人から二〇人の出席者、平均八人で続けられた。そのとき、主に日本領事館の外交官で構成されていたChautanqua の文芸サークルは、彼らの住居でF・W・デーモン夫妻と木曜日の夜に会い、彼に小さい部屋の一つを使用するよう勧め、また隣りの大きい部屋は日本人たちが一般に使用できる読書室や社交場として使用するよう勧めた。同時に、この町〔ホノルル—吉田〕に住む日本人たちに、日曜日の宗教礼拝に集まるように招待状が配布された。

一般的に心のこもった反響があった。こうして、礼拝は強い関心をもたれ、最初は読書室で、後には階上のホールで継続されていった。

最も有能な助手は、ハイドの説教「罪をあがなう神・イエス＝キリストのいのちとことば」を通訳した安藤辰一〔安藤太郎の甥—吉田〕であった。キリスト教は、一つの宗教的信仰の形態としてよりむしろ人の魂における神の現存として示される。福音書に耳を傾けることによって示される熱烈な関心は、神の力がどこででも人間の心に働いている証拠である。出席者は、一八歳から五三歳までで、平均は二〇歳を越えた。

ハイド夫人は、毎週金曜日夜に音楽学校を開始した。出席者は、一三歳から二七歳までいろいろである。讃美歌を歌う能力は、彼らが以前に一度も歌ったことがないということを考慮に入れると、著しい進歩である。J・M・デーモン夫人によって備えられたリードオルガンは、この事業にとって最も重要な付属物である。会費は、このサークルへの出席者より徴収され、こうしてこの部屋にテーブル、ブックケース、シャンデリア、ランプ、いす、瀬戸物類などを備えるために十分な金が確保された。

若い青木が、一八八七年四月一二日にサンフランシスコに行く際、彼はほとんど自分の図書のすべてを寄付した。そのなかには、日本のキリスト教図書刊行会より入手したひじょうに立派な日本語書籍二〇〇冊及び日本語の新聞のとじ込みも含まれていた。

Hibeino氏は、日本製品の配給商店の経営者であり、最初から毎週二夜、七～八人の日本人労働者に英語を教えている。

毎日曜日の夜、コールマン（Hattie Coleman）夫人は、最も興味深い聖書研究会を開催し、一四人から二八人の出席者がある。

この報告によると、宣教師たちは、まず一八八五（明治一八）年の第一回移民がハワイに到着するとすぐ、ハイド博士を中心に日本人移民のための日曜礼拝を開始した。次に、彼らは狭義のキリスト教伝道のみに終始したのではなく、英語学校、音楽学校、聖書研究会などさまざまな活動を開始していった。更に、宣教師たちの日本人移民への伝道は、彼らだけの力でなされたのではなく、ハワイ公使R・W・アーウィンや、日本領事館員及び数名の日本人の協力があったということがわかる。

その後、一八八六（明治一九）年二月一四日、安藤太郎総領事を乗せた第三回移民がハワイに到着して以降、宣教師の日本人移民への伝道活動はより積極的になっていった。“The Friend”の一八八六年三月号に記載された「ザ・ジャパニーズ」と題する報告は、次のように伝えている。[17]

去る二月一四日、蒸気船「シティー・オブ・ペキン」（City of Peking）号が、横浜から二三〇名の女性を含む九四二名の日本人を乗せて、当港に到着した。日本人たちは、健康で、屈強で、行儀よさそうに見える。彼らは、ハワイの労働力供給にとって価値

ある獲得物である。

日本にいたハワイ公使アーウィンも彼らとともに来た。また、ホノルルの新しい日本領事であり、大使である安藤太郎や、医者、通訳など多くのスタッフが日本より派遣されて来た。

二〇日、土曜日夜、デーモン夫妻はChaplains Laneで、これら日本人代表のための歓迎会を催した。そこには、公使アーウィンとその子息、安藤太郎夫妻とその子息、中山譲治夫妻、福島武三夫妻、ナガノ夫妻（Reijiro Nagano）、田中、山下（M. Yamashita）、岩井（F. Iwawi）その他が出席した。日本人たちのうちのいく人かはクリスチャンであり、日本の色々な教派の出身である。彼らに会うために、ひじょうに多くの招待客が出席していた。彼ら招待客は、この社交的享受の機会を通して、疑いなく神がその摂理のなかで私たちに近づけ給うた日本人の霊的安寧に、新しく強い関心をもたされたにちがいない。F・W・デーモン夫妻とデーモン博士夫人とは、この夜、すべての出席者のなかで最も喜んだ人々である。

二一日、日曜日午後、移民局で興味深い宗教礼拝が催された。そこには数百名の日本人が参加した。一年前にホノルルに来た若い神学生青木が、祈りと感話で集会を始めた。ハイド、デーモンが続いてあいさつし、さらにキリスト教会（Church of Christ）出身のオノミ（原文にはOnomiとなっている）、田中が、バラ（Rev. Ballagh）からの手紙でもって簡単なあいさつをした。礼拝は、ハイドの祈祷で閉じられた。その際、パンフレットと聖書が配布された。

私たちは、ハワイ諸島の各島にいる仲間のクリスチャンに、これら日本人たちの高い要求に心を留め、彼らを知的に、霊的に向上させるように奮起するよう要請するだろう。私たちは、日本人の母国へ行くために海を渡ることはしないが、彼ら日本人たちは、私たちのところへやって来ている。そのことによって、私たちの、日本人の魂への負債と、神への責任がひじょうに増すのであるということを忘れないでいてほしい。

また、"The Friend"の一八八六年一〇月号に記載された「ザ・ジャパニーズ」と題する報告では、次のように述べられている。[18]

ハワイ諸島での伝道事業の最も重要な部門のいくつかは、かなりの部分を外国伝道部の事業に依存している。その事業は、ここに住む二万人の中国人に伝道することである。そうして、その事業の特殊な部分は、後になって私たちのところに住みついた数百、数千の日本人の心にイエス＝キリストの福音をもたらすことである。私たちは、今のところはかろうじて日本人たちに生活の

知識を伝えることに着手している。しかし、日本人がいることは、また、日本人に福音を伝えるようにわれわれクリスチャンに訴える力強い声でもある。しばしばいわれることであるが、ここに住むクリスチャンは特に恵まれており、福音を異教の人々に伝えるために外に出ていく必要はない。日本人たちが私たちのところへ来て、私たちは、私たちができる以上に努力して彼らにここで福音を伝えている。

これらの日本人たちは、ひじょうに興味深い、温厚な人々である。中国人と比較すると、日本人はより温和で、愛敬がある。日本人は、ほかの多くの民族にあるような厳しい、こうかつな容貌をしていない。彼らは、その親切さと品行の良さでは、ポリネシア人以上である。日本にいた古代土着の民族は、むかし、大陸にいた優秀なモンゴル民族に征服されたが、その人口の大半は土着の民族で形成していたようである。日本人は、モンゴル人とひじょうに違っているように思える。今日では、日本人は古代におそらく東北アジアで活動していた、東南アジアのマライ人やポリネシア人と混合した特徴をもっている。しかし、日本人は、マライ人のように背は高くない。それはおそらく、氷河期の初期未開時代に困苦と窮乏をなめたことによる。私たちが練習船から、またしばしば街路でも、快活で、知的な顔をした若者を見、日本人がヨーロッパ風の衣服を着けているのを見るとき、民族の違いがより明らかになる。

日本人のすぐれた感受性は、ポリネシア人に似ており、福音伝道の努力のための魅力的な対象物である。最も驚くべきことは、キリスト教に対する日本政府と、日本人の態度が急激に変化したことである。キリスト教をまったく排斥し、抑圧するという厳格な政策より、たちまちここ三〇年、支配者も民衆もキリスト教を快く、歓待して受け入れ、福音を誠心誠意、熱心に歓迎している。このことはひじょうにすばらしいことであり、意外なことであり、キリスト教伝道の熱意を元気づけ、刺激するものである。

そして今、私たちハワイのクリスチャンは、私たちのところに住み、働いているひじょうに多くの感受性の高い、温厚な人々をかかえている。つまり、問題はどのようにして私たちは、私たちの神聖な主であり、知恵であり、希望である主の福音を彼らに伝えればよいかということである。

ハワイに住む日本人が、本国の日本人と同様に、福音に動かされることは疑いないことのようである。日本人は、彼らの母国で、多くの繁栄した教会が急激に増加し、建ち並んでいったように、キリスト教の教えを歓迎して受け入れるだろう。

ハワイが、日本からの移民を迎えることによって、最初のキリスト教国になることはすばらしいことである。それは、神の摂理が私たちに示した特別な名誉であり、恩寵であると考えるべきである。（中略）

ハワイは、すでに日本に数人のひじょうに活発で、有力な宣教師を送っている。彼らは今、日本人の魂のために一生懸命になっている。私たちの主は、日本人が私たちの戸口までやってきて、キリスト教の知恵と、幸福にはいるために、私たちの役割を忠実におこなうよう気をつけて見守っておられる。

この報告によって、ボードの姿勢の一端がうかび上ってくる。すなわち宣教師たちは、まず第三回移民が到着して数日後に、安藤太郎総領事をはじめとし、領事館及び移民局の主脳陣[19]の歓迎会を催すことにより、彼らとの関係を親密にしようとしており、一方、日本の主脳陣の側も、宣教師の伝道活動のためにわざわざ移民局を貸していたのであった。次に、彼らは日本人の品性を賞讃した上で、第一に、日本人はすぐれた感受性をもち、他のハワイ移民よりすぐれていること、[20]第二に、キリスト教に対する日本政府及び日本人一般の態度が急激に変化し、本国の日本人がキリスト教に対して受容的となり、伝道上の成果もあがっているから、同様に、ハワイの日本人移民もキリスト教に対して受容的となり、伝道上の成果も期待できるというように、本国の日本人とハワイの日本人移民を類比してみることによって、日本人移民をハワイ移民及び伝道の対象として高く評価している。

つまり、ハワイアン・ボードは日本人移民に対し、ハワイの移民として、また福音伝道の対象としての有効性に大きな期待をかけていたため、日本からの移民がハワイに到着すると早急に日本の主脳陣に接近し、協力を得ることによって日本人移民社会にキリスト教の急速な浸透を計ろうとした。

こうした宣教師たちの努力の結果が、一八八七（明治二〇）年三月二六日、クィーン・エンマ・ホールで開かれた宗教的集会であった。

この集会の模様について、“The Friend”の一八八七年五月号に記載された、「ジャパニーズ・ヤング・メン」と

題する報告は、次のように報じている。[21]

三月二六日、土曜日夜に、日本人の若者のために取っておかれたクィーン・エンマ・ホールの会場で、最もめでたい〔クィーン・エンマ・ホールの—吉田〕開会式があった。約六〇名の日本人が大きな部屋に集まり、多数ははいりきれずに、ドアや窓の外に立っていた。ハイドが司会し、祈祷でもって礼拝をはじめた。

日本領事安藤太郎は、日本語ですばらしいあいさつをした。彼は英語で話す友人たちのために、それを英語でくり返した。あいさつは、また、中山譲治と、青木によって日本語でなされた。ハイドとデーモンとウオーターハウス（Henry Waterhouse）及び秘書のフラー（Fuller）は、英語であいさつし、それは安藤太郎と青木によって通訳された。

友好的なあいさつと饗宴には、デーモン夫妻が気前よく用意した本物の日本茶と、茶菓子がだされた。部屋は、デーモンと数人の若者によってカンテラ、旗、植物で芸術的に飾られていた。領事とその同僚は、日本人の若者のために催された会合にひじょうに興味を示し、それに可能な限りの激励と援助を示した。聖書を読む会や、夜間クラスや興味深いテーマでなされる懇談会は日本人を魅了し、教育し、この部屋が開放されることは、彼らにとって有益なものとなるだろう。

このようにして、この集会の後、クィーン・エンマ・ホールでは聖書研究会、音楽学校等が日本人のために催され、これが後の、日本人Y・M・C・Aの礎石となった。また日本人主脳陣は、宣教師たちの伝道活動を彼らがキリスト教を好むと好まざるとにかかわらず、援助していくのである。

その件に関して、今泉源吉『先駆九十年　美山貫一と其時代』は次のように述べている。[22]

毎日曜朝ハイドの説教があり当夜はバイブルクラス、火曜の夜はリーディングクラス、其外英語の讃美歌を教へる夜学校があつた。図書室には日本語の聖書と注釈書やいろいろの本が備へ付けられてあつた。安藤は白人宣教師から日本人伝道の援助を求められたが、職責上からも又白人優越の国柄からもいやとは云へぬ、表面賛成者を装つて此の七八ヵ月間毎日曜夫妻は領事館員をつれて礼拝に出席している。安藤の甥の進一〔辰一—吉田〕にハイドの説教の通訳までさせているが、内心は大の耶蘇嫌ひであつた。

四　むすび

ハワイの日本人移民への伝道は、一八八七（明治二〇）年九月三〇日、美山貫一の来布によって日本人共済会、禁酒会の設立など広範な展開をみせる。しかし、美山の活動の前史としてハワイアン・ボードによる草分け的な日本人伝道は、同様に決して見落とすことはできないのであり、その経緯は次のように説明できる。

すなわち、第一にハワイアン・ボードによる日本人移民伝道は、すでに一八八五（明治一八）年二月八日、第一回「官約」移民が到着すると同時に、ハイドを中心に開始された。

第二に、彼らの伝道活動は、聖書研究会をはじめ、英語教育、音楽教育などに日本人移民を導く多様な形態をもっていた。

第三に、日本人移民をハワイの移民として、また伝道の対象として注目し、期待した。その理由は、日本人の気質が、他の移民たちより優れていること。さらに、本国の日本人がキリスト教に対して受容的で、伝道の成果があがっているので、ハワイへの日本人移民も同様の趨勢をもつとみたからである。

第四に、彼らの伝道は、当初より日本人主脳陣の協力をえていた。とくに安藤太郎総領事が赴任して以降はその傾向が一層強まる。こうして、一八八七（明治二〇）年一〇月一三日、日本人Y・M・C・Aの設立へと向かう。

しかし、ハワイアン・ボードの日本人移民伝道はその期待とは裏腹に、「会員常ニ稀少ニシテ、或ハ中絶ニ至ラントスルノ状況」[23]であった。その原因はハワイアン・ボードの日本人移民伝道に対する安易な姿勢にあった。すなわち、日本人移民が置かれた境遇や、キリスト教とまったく異質な宗教及び文化をもち、しかも、日本国内とは違い、

ハオレが支配するハワイで、キリスト教はマジョリティーの宗教であるという特殊性を踏まえない伝道であったのである。ハワイアン・ボードがぶちあたった壁は、美山貫一の協力によってようやく打ち破ることができたのである。

（ハワイアン・ボード関係の資料はハワイ大学の Hawaiian and Pacific Collection, Hamilton Library の御厚意により閲覧をさせていただいた。厚く謝意を表したい。）

注

(1) 美山貫一（一八四七――一九三六）のハワイ伝道については、今泉源吉『先駆九十年　美山貫一と其時代』（みくに社、一九四二年）参照。

(2) 安藤太郎は、一八八六（明治一九）年二月一四日にハワイの日本領事としてホノルルに赴任する。

(3) 前掲『先駆九十年　美山貫一と其時代』二二五ページ、尚引用文については原文に付されている傍点を略した。

(4) 財団法人開国百年記念文化事業会編『日米文化交渉史5――移住編』（洋々社、一九五五年）四二六ページには次のように述べられている。「ハワイの日本人移住者に対し、最初に布教したのもキリスト教であった。すなわち、一八八六年（明治十九年）にハワイ伝道会社のハイド博士（Dr. C. M. Hide）によって、前年ハワイに渡航してきた日本人（最初の官約移民）に対する伝道がはじめられた。」

また、ハワイ日本人移民史刊行会編『ハワイ日本人移民史』（布哇日系連合協会、一九六四年）の二二三ページには、次のように述べられている。

「ハワイの日本人移住者に対し、最初に布教したのもキリスト教であった。すなわち一八八六年（明治十九年）に、ハワイ伝道会社（第一回宣教師団の来布後三年目の一八二三年に創立――組合派）のハイド博士（Dr. C. M. Hide）によって、前年ハワイに渡航してきた日本人（最初の官約移民）に対する通訳付き英語伝道がはじめられた。」とあり、両者とも一八八六（明治一九年）年を出発点にしている。

(5) "Missionary Herald", 1888, p. 46.

(6) 尚、ハワイアン・ボードの性格については後述する。

(7) Oscar E. Maurer "How the Gospel Came to Hawaii" (The Central Union Church, Honolulu) pp. 7-13.

(8) ibid, pp. 9-10.

(9) 'Our Agencies For God And Humainity' ("The Friend", 1887, January, p. 3)

(10) ハワイアンボードの伝道は、'Historical and Statistical Chart of the Protestant Hawaiian Mission, Sent to the

Paris Exposition' ("The Friend", 1889, March)によると、次のような年譜になる。

一八二〇年三月三〇日　最初の宣教師が、ハワイのカイルアに上陸する。
一八二一年　ホノルルに最初の礼拝堂が建てられる。
一八二二年一月　七日　ハワイ諸島で最初の印刷が始められる。
一八二三年四月二七日　第二回、宣教師グループが到着する。
一八二八年三月三〇日　第三回、宣教師グループが到着する。
一八二九年七月二九日　ホノルルで最初の集会場が建てられる。
一八三二年五月一七日　第五回、宣教師グループが到着する。
一八三三年五月　一日　第六回、宣教師グループが到着する。
一八三四年二月一四日　最初の新聞紙が発行される。
一八三五年六月　八日　第七回、宣教師グループが到着する。
一八三六年　ワイルク（マウイ）で女子神学校が開設される。
一八三六年　子どもたちのため、ヒロ・ボーディングスクールが開設される。
一八三七年四月　九日　第八回、宣教師グループが到着する。
一八三八年　現住民たちは、キリスト教にひじような関心を寄せる。
一八三九年　一〇、七二五人が教会員となる。
一八三九年五月一〇日　ハワイ語訳聖書の第一版が完成する。
一八四一年五月　一日　第九回、宣教師グループが到着する。
一八四二年七月二一日　ホノルルに Kawaiahao 石造教会が完成する。
一八四二年九月二一日　第一〇回、宣教師グループが到着する。
一八四四年七月一五日　第一一回、宣教師グループが到着する。
一八四四年　一八三九年より一八四四年までのハワイ人教会員の合計は、三〇、三五七人となる。
一八五一年　ハワイ伝道会（Hawaiian Missionary Society）が創設される。
一八五二年七月一五日　最初のミクロネシア伝道開始。三

一八五三年　人のハワイ人が宣教師として派遣される。

一八五七年四月二四日　二人のハワイ人宣教師がハワイ諸島よりマークェサスへ送られる。

一八六三年六月　三日　最初の宣教師定期船 "Morning Star" がホノルルに到着する。

一八七〇年　ハワイ福音連盟 (Hawaiian Evangelical Association) が組織される。

一八七〇年　ハワイ伝道五〇年祭。

一八七〇年　伝道五〇年間に五三、三〇〇人が教会員となる。

一八七七年　五〇周年に至るまでのハワイ伝道の費用は、一、二二〇、〇〇〇ドルである。

一八八四年　ホノルルで神学校の再編成。それ以後、北太平洋伝道会 (North Pacific Missionary Institute) として知られている。

一八八八年　プロテスタントの人口調査で二九、六八五人となる。教会数五八、教職数五三、教会員数五、二三五人となる。

一八八八年　牧師給への寄付は七、八七〇・三三ドル、教会へは二四、六七四・八七ドルとなる。

一八八八年　今日に至るまでに六二人のハワイ人宣教師（男三二人、女三〇人）がハワイ諸島より外国（マークェサス八名、ミクロネシア五〇人）に派遣される。

一八八八年六月一〇日　ホノルルに新しいレンガ造りの Kaumakapili 教会が献堂される。ハワイ伝道五〇年間に、一四五人のアメリカ人宣教師がハワイ伝道に従事した。一八三七年以来五〇年間にハワイ人の教会は、外国伝道会より合計一三三、〇一五・八六ドルの寄付を受けた。伝道開始よりのハワイ人牧師の合計は一三六人である。

(11) ハワイ日本人移民史については、前掲『日米文化交渉史5——移住編』、前掲『ハワイ日本人移民史』、足立聿宏『ハワイ日系人史——日本とアメリカの間に在りて——』（葦の葉出版会、一九七七年）、川添善市『移民百年の年輪』（移民百年の年輪刊行会、一九六八年）、Francis Hilary Conroy

"The Japanese Frontier In Hawaii, 1868-1898" (Arno Press, New York, 1978) などを参照。

(12) 奥村多喜衛（一八六五――一九五一）『布哇伝道三十年略史』（一九一七年）、一～二ページ。

(13) 前掲書、二二二ページ。

(14) pp. 12-13.

(15) 'Report of the Japanese Department of Work in Queen Emma Hall' ("The Friend", p. 41).

(16) ibid.

(17) 'The Japanese' (ibid, p. 4).

(18) 'The Japanese' (ibid, p. 8).

(19) この歓迎会に出席した日本人側代表全員の素姓はわからないが、わかっている範囲でいうと、中山は移民局局長、岩井及び山下は官医、福島は移民監査官である。

(20) 当時の労働者人口は次のとおりである『日米文化交渉史 5――移住編』四七一ページ参照）。

一八八六年（明治十九年）　ハワイ及混血ハワイ人（二、二五五人）、ポルトガル人（三、〇八一人）、其他白皙人（三七九人）、中国人（五、六二六人）、日本人（一、九四九人）、其他（一、二四九人）、計（一四、五三九人）。

一八八八年（明治二一年）　ハワイ及混血ハワイ人（二、〇六二人）、ポルトガル人（三、一三二人）、中国人（五、七二七人）、日本人（三、二九九人）、其他（一、三五八人）、計（一五、五七八人）。

(21) 'Japanese Young Men' (ibid, p. 40).

(22) 前掲書、二二二ページ。

(23) 前掲『先駆九十年　美山貫一と其時代』二二五ページ。